

令和3年4月19日

千葉県農林総合研究センター長

I 向こう1か月の予報

発生量及び発生時期は平年との比較で表す。予想発生量は「多」「やや多」「並」「やや少」「少」で表している。また、予報の根拠の(+)は多発要因、(-)は少発要因であることを示す。並[発生なし]は平年並で、今年発生がないことを示す。

なお、「並」とは平年値を中心にして40%の度数に入る幅、「やや多」「やや少」は「並」の外側20%の度数に入る幅、「多」「少」は上記3者の外側10%の度数に入る幅である。

作物名	病害虫名	予想発生量	予報の根拠	防除上の注意事項
イ ネ	イネミズゾウムシ	やや少 予想発生時期 早	2月越冬量：やや少(-) 気象予報：気温並 3月1日以降の有効積算温度 ：高	<ul style="list-style-type: none"> 常発地や昨年多発したほ場では、苗箱処理剤で薬剤防除する。 移植10日後ごろの飛来成虫数が2～3株に1頭以上の時は、成虫を対象に薬剤防除する。 令和2年度病害虫発生予報第11号P4～5「これから注意を要する病害虫」も参照する。
	ヒメトビウンカ	並	2月越冬量：並	<ul style="list-style-type: none"> イネ縞葉枯病を媒介する。 昨年、栽培期間中や再生株で縞葉枯病が多発したほ場では、苗箱処理剤で薬剤防除する。 令和2年度病害虫発生予報第11号P4～5「これから注意を要する病害虫」も参照する。
	イネクロカメムシ	少	前年7月の発生量：並 2月越冬量：少(-)	<ul style="list-style-type: none"> 越冬成虫の水田への侵入時期は5月下旬から6月である。 令和2年度病害虫発生予報第11号P4～5「これから注意を要する病害虫」も参照し、苗箱処理剤での防除では6月まで効果の持続する薬剤を選択する。 6月中旬ごろ発生を観察し、多発の場合は薬剤防除する。

作物名	病害虫名	予想発生量	予報の根拠	防除上の注意事項
イ ネ	イネドロオイムシ	並	前年の発生量：並	<ul style="list-style-type: none"> 常発地や昨年多発したほ場では、苗箱処理剤で薬剤防除する。 令和2年度病害虫発生予報第11号P4～5「これから注意を要する病害虫」も参照する。 侵入最盛期（5月中旬ごろ）の飛来成虫数が10株に2頭以上の時は、薬剤防除する。
	スクミリンゴガイ （ジャンボタニシ）	やや多	冬期気温（12～2月の気象庁アメダス千葉毎正時データの平均値）：並 前年6月の発生量：多（+） 前年6月の被害株率：多（+）	<ul style="list-style-type: none"> 水田取水口に目合い5～10mmの網袋を設置し、侵入を防止する。 移植後3週間は水深4cm以下の浅水にし、必要に応じ薬剤防除する。 令和2年3月17日発表の令和元年度病害虫発生情報第3号も参照する。
冬 春 ト マ ト	うどんこ病	やや少	4月上旬発生量：並 気象予報：日照時間並か多（-）	<ul style="list-style-type: none"> 被害茎葉は、施設外に持ち出し、適切に処分する。
	灰色かび病	やや多	4月上旬発生量：多（+） 気象予報：日照時間並か多（-）	<ul style="list-style-type: none"> 施設内の換気を良くし、湿度を下げる。 被害果や被害茎葉は施設外に持ち出し、適切に処分する。 令和2年度病害虫発生予報第9号P5「これから注意を要する病害虫」も参照する。
	コナジラミ類	やや多	4月上旬発生量 オンシツコナジラミ：やや多（+） タバココナジラミ：並〔発生なし〕 3月黄色粘着板誘殺数：やや多（+） 気象予報：気温並 日照時間並か多（+）	<ul style="list-style-type: none"> 施設内外の除草等で耕種的防除に努める。 タバココナジラミについては、黄化葉巻病を媒介する。黄化葉巻病発病株は必ず抜き取り、適切に処分する。 栽培終了時にはハウス内を除草、トマトを抜根した状態でハウスを密閉し、完全に枯死させて本虫を死滅させる。 令和2年度病害虫発生予報第2号P3「これから注意を要する病害虫」も参照する。

作物名	病害虫名	予想発生量	予報の根拠	防除上の注意事項
スイカ	つる枯病	並	4月上旬発生量： 並 [発生なし] 気象予報：気温並 降水量並	<ul style="list-style-type: none"> ほ場の排水をよくする。 多湿を防ぐため、トンネルの換気を適切に行う。
	アブラムシ類	並	4月上旬発生量： 並 [発生なし] 気象予報：気温並 降水量並	<ul style="list-style-type: none"> ほ場周辺の雑草を除去する。 薬剤散布は葉裏まで十分かかるよう、丁寧にを行う。 繁殖が早く、短期間で高密度となるため、防除適期を逃さずに早期防除する。 同系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。
	ハダニ類	やや多	4月上旬発生量：やや多 (+) 気象予報：気温並 降水量並	
温州ミカン	そうか病	やや多	3月下旬発生量：やや多 気象予報：気温並 降水量並	<ul style="list-style-type: none"> 新梢の長さ 1 cm くらいが防除適期である。
	ミカンハダニ	並	3月下旬発生量：並 気象予報：気温並 降水量並	<ul style="list-style-type: none"> 冬期防除を見合わせていた園地では 4～5 月に防除を行う。 マシン油乳剤 (97%) は使用時期で希釈倍率が変わるので注意する。
カーネーション	ハダニ類	やや多	3月下旬発生量：やや多 気象予報：気温並 降水量並	<ul style="list-style-type: none"> 早期発見に努め、発生初期から薬剤防除する。 同系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。
	アザミウマ類	並	3月下旬発生量：並 3月黄色粘着板誘殺数：並 気象予報：気温並 降水量並	<ul style="list-style-type: none"> 施設内外の雑草や花がらは適切に処分し、ほ場周辺に放置しない。 同系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。

II その他の情報

令和2年度における農作物の主要病害虫の発生状況について

○気象概況

4月の平均気温は、平年並か低く、降水量が多かった。5月は、平均気温が平年より高くなった。

梅雨入りは、6月11日頃、梅雨明けは、8月1日頃と平年より遅くなった。6月は、平均気温は平年に比べて高く、降水量が多かった。7月は、曇りや雨の日が多く、降水量がかなり多く、日照時間は平年の40%程度と少なかった。7月9日に日照不足と長雨に関する情報が気象庁から発表された。

8月は、梅雨明け後に晴れて厳しい暑さの日が多く、記録的な高温となり、降水量は少なかった。局所的に激しい雨が降ったところもあった。9月は、平均気温は高く、降水量は平年並であった。10月は、曇りや雨の日が多く、気温降水量ともに平年並で、日照時間は少なかった。11月は、平均気温が平年より高く、降水量はかなり少なかった。12月は、平均気温は平年並、降水量は平年より少なくなった。日照時間は、館山、勝浦は平年並、銚子、千葉は平年に比べ少なかった。

1月は、上旬は晴れた日が多く、中旬は短い周期で天気は変化し、下旬は雨の日が多かった。平均気温は銚子、館山、勝浦は平年に比べ高く、千葉は平年並だった。降水量、日照時間は平年並だった。2月も晴れた日が多く、いずれの地域も気温が高く、日照時間は記録的に多かった。降水量は、千葉、館山は平年並、銚子は少なく、勝浦はかなり少なくなった。3月も、いずれの地域も気温が高く、降水量は館山で多く、他の地域は平年並、日照時間は勝浦で多く、他の地域は平年並だった。

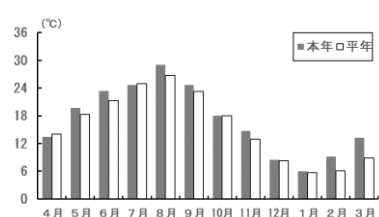


図1 日平均気温の月別平均値
(千葉市)

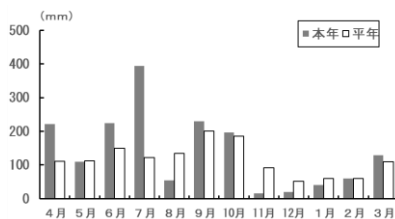


図2 月間降水量累計値
(千葉市)

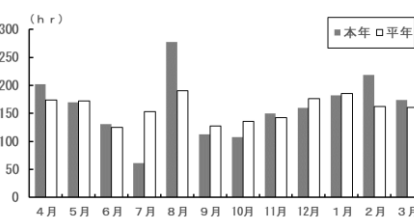


図3 月間日照時間累計値
(千葉市)

○病害虫発生状況

1 イネ

4月中下旬の気温が平年より低かったことにより、5月上旬調査では、スクミリンゴガイの被害株率は、昨年より低かった(図4)。しかし、過去10年で、単位面積当たり平均個体数は昨年に次いで2番目に多く(図5)、発生地点率が最も高かったことから、5月12日に発生情報を発表した。6月上旬調査では、被害株率、単位面積当たり平均個体数ともに過去10年で最も高くなった(図4、5)。

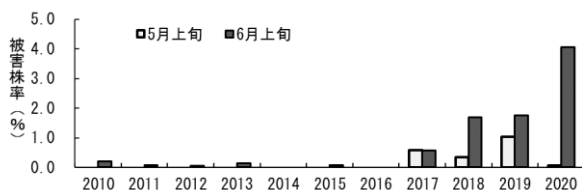


図4 スクミリンゴガイの年次別被害株率

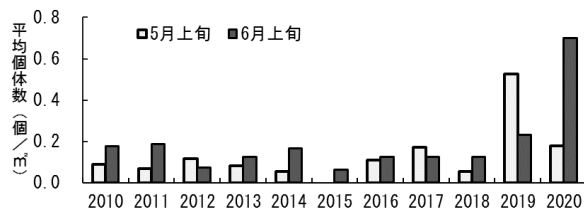


図5 スクミリンゴガイの年次別単位面積当たり平均個体数

7月上旬の雑草地における掘り取り調査でアカスジカスミカメが平年を上回る多発生となり、「斑点米カメムシ類（特にアカスジカスミカメ）による斑点米発生に注意」の注意報を発出したが、その後の発生は並からやや多の発生にとどまった。また、収穫期の大型斑点米カメムシ類の発生は、やや多であった。

縞葉枯病は、ヒメトビウカの越冬量が多かったが、平年並の発生であった。いもち病は、梅雨明けが平年より遅くなり低温少日照の期間が長くなったため、葉いもちが過去10年で最も多くなったが、梅雨明け後、高温傾向となったため、穂いもちへの進展は、早生品種や限られた地域でのみ見られた。

2 普通畑作物

(1) サツマイモ

イモキバガの被害は、6月はやや多、7月はやや少、8月は多、9月はやや少、10月は平年並と、増減を繰り返した。ナカジロシタバの寄生は、8月に多となったが、9月にはやや少となった。その他の食葉性害虫による被害は、6月から9月まで多あるいはやや多であったが、10月は平年並となった。

(2) ラッカセイ

褐斑病は、調査期間を通してやや多あるいは多の発生が認められた。茎腐病は、9月にやや多の発生が認められた。ヒョウタンゾウムシ類は、調査期間を通して平年並あるいはやや少の発生が認められた。チョウ目害虫が、7から8月にやや多の発生が認められた。

3 野菜

(1) スイカ

つる枯病は、6月にやや多の発生が認められた。うどんこ病は、6月に平年並の発生が認められた。アブラムシ類は、4月にやや多の発生が認められた。ハダニ類は、4月、5月に多発生が認められた。

(2) サトイモ

汚斑病は、7月までは発生が認められなかったが、8月以降多発生となった。疫病は、8月に北総地区、山武地区において発生が認められ、9月には多発生ほ場が認められた。アブラムシ類は、調査期間を通して、やや少から平年並の発生となった。ハスモンヨトウは、8月までは発生は認められなかったが、9月に平年並の発生となった。ハダニ類は、8月までは少から平年並の発生であったが、9月には多発生となった。

(3) 夏秋トマト

葉かび病は、8月下旬にやや多、9月以降に多発生となった。灰色かび病は、9月下旬に葉への発生があり、10月下旬には葉と果実で発生がみられ、果実ではやや多の発生になった。黄化葉巻病は、7月下旬にやや多の発生となり、8月下旬からは並の発生で推移した。すすかび病は、調査期間を通して、やや多または多の発生であった。うどんこ病は、7月下旬に多発生、8月下旬にやや多の発生であった。コナジラミ類は、8月下旬、9月下旬に黄色粘着板で多の誘殺数が認められた。オンシツコナジラミの寄生株率は、7月下旬から9月下旬に、やや多であった。タバココナジラミは、8月下旬、9月下旬に寄生株率が多であった。

(4) 秋冬ネギ

ネギアザミウマは、7月にやや多、11月、12月に多の発生であった。ハスモンヨトウは、9月にやや多、11月に多の発生が認められた。シロイチモジヨトウは、10月にやや

多, 11月, 12月に多の発生があった。ネギハモグリバエは, 11月, 12月にやや多の発生があった。ネギコガは, 8月, 9月にやや多の発生があった。

(5) 冬レタス

菌核病は, 1から2月にやや少の発生があった。オオタバコガは, 1月にやや多の発生があった。

(6) イチゴ

うどんこ病は, 12月と2月にやや多の発生があった。炭そ病は, 10月にやや多の発生があった。アブラムシ類は, 10月に, アザミウマ類は, 12月と3月にやや多の発生があった。灰色かび病は, 3月にやや多の発生があった。

(7) 冬キャベツ

菌核病の発病は, 12月から多となった。灰色かび病は, 過去11年で初めて, 1月に発生した。黒腐病の発病は, 11月から1月までやや多であった。アブラムシ類の寄生は, 12月にやや多であった。コナガの寄生は, 平年並であった。

(8) 春キャベツ

菌核病の発病は, 2月から多となった。黒腐病の発病は, 12月に多, 1月にやや多となった。コナガの寄生は, 1月に多となった。

(9) 冬春トマト

うどんこ病は, 12月に, 疫病は, 2月にやや多の発生になった。灰色かび病は, 12月から4月にやや多あるいは多発生となり, 特に2月以降は平年を大きく上回った。黄化葉巻病は, 12月, 1月にやや多の発生であった。オンシツコナジラミが, 1月と4月にやや多の発生であった。ハモグリバエ類が, 3月と4月に多発生になった。葉かび病は, 3月から確認され, やや多から多発生であった。すすかび病も, 4月から確認された。

(10) 冬春キュウリ

うどんこ病は, 12月および2月にやや多の発生があった。べと病は, 11月から1月は少発生で推移したが, 2月にやや多の発生になった。タバココナジラミが, 12月に多の発生であった。

(11) チョウ目害虫 (フェロモントラップ)

- ①ハスモンヨトウの誘殺数は, 6月下旬から7月にかけて平年を上回り, 6月はやや多, 7月は多の誘殺数であった。また, 9月と11月にも一時的に平年を上回り, 11月はやや多の誘殺数であった(図6)。
- ②コナガの誘殺数は, 3月にはやや多の誘殺数で, 4月からは, 5月の第5半旬から6月の終わりにかけて平年を上回ったが, 12月まではおおむね平年並で推移した(図7)。
- ③オオタバコガの誘殺数は, 年間を通して平年並か少なく, 5月から9月まではやや少か少で推移した(図8)。
- ④タバコガの誘殺数は, 4月の第4半旬まで平年を上回りやや多の誘殺数であった。その後は, 10月には平年を上回る誘殺数がみられたが, おおむね平年並か少なく推移した(図9)。

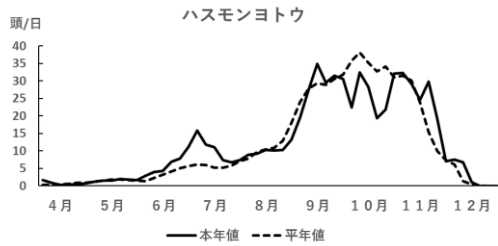


図6 フェロモントラップにおけるハスモンヨトウ発生消長（1日あたりの誘殺数）

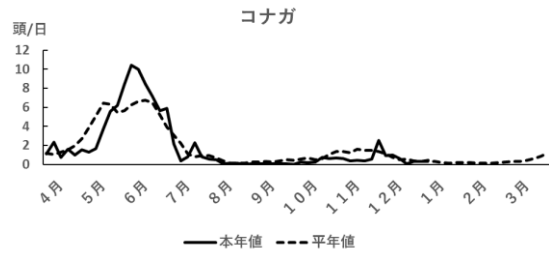


図7 フェロモントラップにおけるコナガの発生消長（1日あたりの誘殺数）

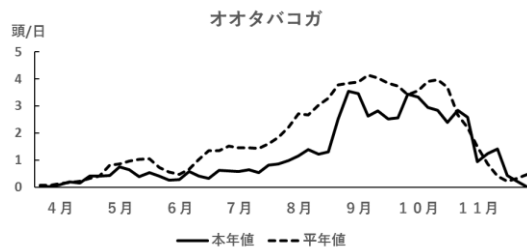


図8 フェロモントラップにおけるオオタバコガの発生消長（1日あたりの誘殺数）

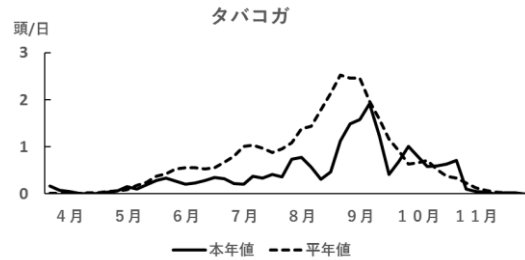


図9 フェロモントラップにおけるタバコガの発生消長（1日あたりの誘殺数）

4 果樹

(1) ナシ

黒星病は、葉、果実とも、おおむねやや少の発生であった。シンクイムシ類とハマキムシ類の発生は、並の発生であった。ハダニ類は、8月に多の発生であった。アブラムシ類の発生は、平年よりやや少なかった。

(2) カンキツ

かいよう病は、6月と7月に多の発生であった。そうか病は、7月から9月はやや多あるいは多の発生で推移した。黒点病は、9月と10月に多の発生であった。ミカンハダニは、3月にやや多の発生があったが、その後は少から平年並で推移した。ミカンハモグリガは、10月に多の発生があった。アブラムシ類は、10月にやや多の発生があった。

(3) ビワ

灰斑病は、やや多から多の発生であった。アブラムシ類、カメムシ類は、平年並の発生であった。カミキリムシ類は、少から平年並の発生で推移した。

(4) 果樹共通：果樹カメムシ類

フェロモントラップ誘殺数は、概ね平年並であったが、7月は平年を下回った。ナシでは、7月の果実被害がやや多であった。カンキツでの果実の被害は無かった。

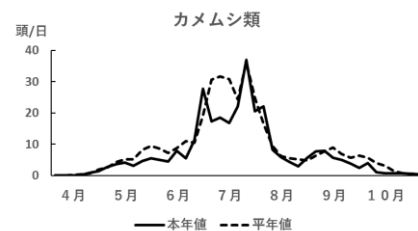


図10 フェロモントラップにおけるカメムシ類の発生消長（1日あたりの誘殺数）

5 花き類

(1) カーネーション

立枯病は、平年並の発生であった。害虫については、アブラムシ類は、黄色粘着板で並から多の誘殺がみられたが、植物への寄生については平年並だった。また、アザミウマ類、ハダニ類は、少からやや少の発生、チョウ目害虫については、平年並の発生であった。

(2) ストック

菌核病は、施設、露地とも平年並であった。コナガは、施設では、平年並の発生、露地では少からやや少の発生であった。アブラムシ類は、施設での発生は認められず、露地ではやや少

の発生であった。ハイマダラメイガの発生は、施設での発生は認められず、露地では平年並の発生であった。

● 特殊報, 警報, 注意報の発表状況

1 病害虫発生予察注意報

令和2年7月9日 第1号 斑点米カメムシ類（特にアカスジカスミカメ）による斑点米発生に注意

2 病害虫発生情報

令和2年5月12日 第1号 スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）の発生に引き続き注意

令和3年3月16日 第2号 キクノネハネオレバエの県内初確認

参考資料

○主要病害虫の発生状況

巡回調査結果（水稲：2月中旬，野菜：4月上旬，果樹・花き：3月下旬）

作物名 (調査地域)	病害虫名	調査項目	調査結果			備考	
			本年値	平年値	前年値		
イネ (県内全域)	イネミズゾウムシ	畦畔0.25㎡越冬成虫数	0.23	1.89	0.43		
		イネゾウムシ	畦畔0.25㎡越冬成虫数	0.31	0.27		0.33
		イネクロカメムシ	畦畔0.25㎡越冬成虫数	0.00	0.12		0.03
	ヒメトビウンカ	25株当たり寄生成幼虫数	0.17	0.75	0.01		前年7月調査
		畦畔3㎡吸い取り成幼虫数	2.02	2.35	4.64		
		ツマグロヨコバイ	畦畔3㎡吸い取り成幼虫数	1.15	2.98		8.81
	イネドロオイムシ	25株当たり寄生成虫数	0.37	0.46	0.11		前年6月調査
		スクミリンゴガイ	被害株率(%)	4.06	0.45		1.76
			1㎡当たり貝数	0.70	0.14		0.23
冬春トマト (海匠，長生)	うどんこ病	発病株率(%)	2.00	1.75	0.00		
		灰色かび病	発病株率(%)	44.00	8.20		13.20
		発病果率(%)	0.61	0.25	0.18		
		果実発病度	3.90	1.45	1.09		
	葉かび病	発病株率(%)	0.40	0.28	0.00		
		アブラムシ類	成幼虫寄生株率(%)	0.00	0.08		0.00
		黄色粘着板誘殺数	0.40	0.09	0.10		
	オンシツコナジラミ	成虫寄生株率(%)	0.40	0.94	0.00		
	タバココナジラミ	成虫寄生株率(%)	0.00	0.08	0.80		
	コナジラミ類	黄色粘着板誘殺数	4.50	4.03	0.20		
	ハスモンヨトウ	幼虫寄生株率(%)	0.00	0.00	0.00		
	ハモグリバエ類	幼虫寄生株率(%)	1.60	0.16	1.60		
	アザミウマ類	成幼虫寄生株率(%)	0.00	0.00	0.00		
春キャベツ (海匠)	菌核病	発病株率(%)	3.00	1.32	8.00		
		黒腐病	発病度(%)	0.00	0.10		1.00
	灰色かび病	発病株率(%)	15.00	0.34	1.00		
	アブラムシ類	成幼虫寄生株率(%)	0.00	1.59	5.00		
	コナガ	10株当たり寄生幼虫蛹数	0.50	0.16	0.90		
スイカ (印旛，山武)	つる枯病	発病葉率(%)	0.00	0.00	0.00		
		アブラムシ類	成幼虫寄生葉率(%)	0.00	0.18		0.40
	ハダニ類	雌成虫寄生葉率(%)	0.20	0.06	0.40		
	ウリハムシ	寄生成虫数	0.00	0.00	0.00		
温州ミカン (安房)	そうか病	発病度	0.12	0.04	0.00		
		かいよう病	発病度	0.36	0.01		0.00
	ミカンハダニ	雌成虫寄生葉率(%)	4.40	4.90	4.40		
	クワゴマダラヒトリ	被害葉率(%)	0.00	0.02	0.00		
ビワ(安房)	灰斑病	発病葉率(%)	5.25	4.20	4.25		
		アブラムシ類	成幼虫寄生葉率(%)	0.00	0.00		0.00
	カミキリムシ類	被害穴数	0.25	0.05	0.00		
カーネーション (安房)	萎凋病	発病株率(%)	0.00	1.50	0.00		
		立枯病	発病株率(%)	1.60	0.86		0.00
	アザミウマ類	成幼虫寄生株率(%)	0.00	1.22	0.00		
		被害株率(%)	9.60	11.28	5.00		
		黄色粘着板誘殺数	2.0	6.0	11.0		
	ハダニ類	雌成虫寄生株率(%)	8.80	1.70	0.00		

トラップ月間誘殺数(3月)

種類	病害虫名	トラップ設置場所	誘殺数(頭/日)			備考
			本年値	平年値	前年値	
性フェロモン	コナガ	海匠	2.0	0.7	1.3	
性フェロモン	ハスモンヨトウ	海匠	0.2	0.1	0.2	

○気象予報

4月15日気象庁発表

関東甲信地方における向こう1か月の確率(%)

要素	低い・少ない	平年並	高い・多い
気温	30	30	40
降水量	40	30	30
日照時間	20	40	40

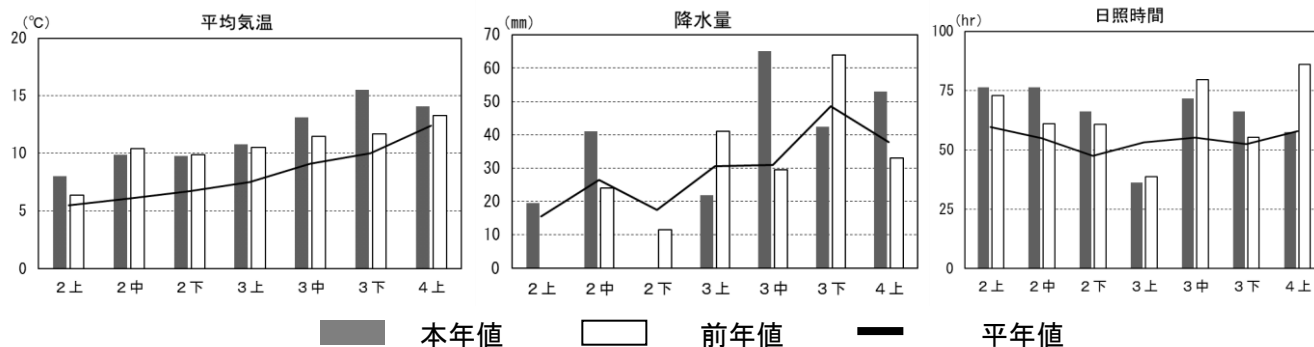
出典：気象庁ホームページ

(https://www.jma.go.jp/jp/longfcst/103_00.html)

向こう1か月の各気象要素の平年値

(4月19日～5月16日銚子地方気象台資料)

要素	千葉	銚子	館山
気温(°C)	16.7	15.5	16.7
降水量(mm)	94.9	115.3	131.8
日照時間(hr)	160.3	163.6	161.8



農薬は適正に使用しましょう。無登録農薬の使用はできません。

- 農薬は、農薬取締法に基づいて、使用できる農作物の種類、適用病害虫、希釈倍数、収穫前日数、総使用回数などが定められています。
- 登録番号のない薬剤は、農薬として使用できません。登録農薬には必ず登録番号が記載されています（記載例 農林水産省登録第〇〇〇号）。
- 農薬はラベルをよく読んで適正に使用しましょう。
- 飛散しないよう工夫して散布しましょう。
- 農薬を使用したら必ず記帳するようにしましょう。
- タンクやホースは洗いもれがないようきれいに洗っておきましょう。

- ・ 病害虫発生予察情報はインターネットでもご覧いただけます。
<https://www.pref.chiba.lg.jp/lab-nourin/nourin/boujo/>
- ・ 次回の発行予定は5月17日です。なお、注意報等の臨時情報は逐次発行されます。
- ・ 薬剤の選定については、最新の農薬登録情報を確認してください。
<https://pesticide.maff.go.jp/>

問い合わせ先

千葉県農林総合研究センター病害虫防除課

〒266-0014 千葉市緑区大金沢町180番地1

TEL 043(291)6077 FAX 043(226)9107

E-mail cafrc-bojo@mz.pref.chiba.lg.jp

